

漢語形態素を構成する音節の音素配列とその変遷

浅田健太郎*

[要旨]

本稿では日本漢字音の音節内部における音素配列について、歴史的観点から調査を行った。

12世紀中頃において、論理的に結合可能な音節の種類は742、そのうち漢字音として実際に使用されている音節の種類は400である。使用率(結合可能な音節数に対する、実際に使用されている音節の割合)は54%であった。現代語において、論理的に結合可能な音節の種類は474、そのうち漢字音として使用されている音節の種類は295で、使用率は62%であった。したがって、音素成員の削減も含めた音素配列上の規則の変化によって、105音節が現代語までに区別されなくなったことになる。

外的要因によって成立した日本漢字音の音韻体系は、和語の音韻体系に比して、成員が多く、あきまの多い体系であった。現代語に変化していく過程で起こった成員の統合・削減は、結果としてそのあきまを埋める働きをしている。一方で、連母音の長音化によるオ段長音の増加は、例えば/eJ/や/aR/などの新たなあきまを生み出したが、全体としては区別する音節数を縮小しながら、あきまを少なくしてきたと言える。

キーワード：漢語、音節、音素配列、音節構造、あきま

0. はじめに

漢語は日本語の語彙のなかで大きな割合を占めているが、漢語を構成する音節について言えば、借用元である中国語と比べて固有日本語(和語)の音節構造が単純であったため、和語の音節よりも少し複雑な構造を持つものとして成立した。そして時代が下るにつれ、和語と一致する方向でさらに単純化されてきたため、現代語では、少数の音節の組み合わせによって形態素が構成されるという特徴を有する。漢語が文字への依存性の強い語彙群であると言われる(小松2001など)のは、このような成立の事情とその後の変化による。

さて、本稿では日本漢字音の音節の単純さについて考察するが、その「単純さ」の指す内容としては、①2音節までの組み合わせで1形態素を形成するという、1形態素に使用可能な音節数の制限による単純さと、②頭子音や末子音の重複を許さないなど、音節内の音素の組み合わせ、すなわち音素配列の制限による単純さとがある。このうち②の観点では、既に日本語の語彙全体を対象とした福島1986、松崎1994、入江2011などの調査があるが、本稿では漢語形態素を構成する音節に問題を絞り、歴史的観点から音素配列がどのような変遷を辿ったのか、また音素配列がどれくらい単純になったかについて、調査を行う。

* 島根大学法文学部言語文化学科 准教授

1. 現代語における漢語形態素を構成する音節の音素配列

まず、城田1995等を参考に、日本語の漢語音節の構造とそれを構成する成員(音素)について次のように把握したい。なお音節はある一定の規則に則った分節音の配列とし¹⁾、漢語音節の場合は次の構造を持つものとする。なお、拗音は拗音音素/j/を析出せず、子音の違いとして見る。また韻尾については、長音音素を認める。

CVE(頭子音+主母音+韻尾)

C(任意): 非口蓋化子音(直音系列)C /k, g, s, z, t, d, n, h, b, p, m, r, w/

口蓋化子音(拗音系列)C^j /j, k^j, g^j, s^j, z^j, t^j, n^j, h^j, b^j, p^j, m^j, r^j/

V(必須): /a, i, u, e, o/

E(任意): /R(長音), J(イ), Q(促音), N(撥音)/²⁾

現代語における漢語のデータとして、語種辞書『かたりぐさ』³⁾を使用する。国立国語研究所の提供する語種辞書『かたりぐさ』は、奈良先端科学技術大学院大学松本研究室より公開されている形態素解析システム『茶釜(ChaSen)』付属の電子化辞書『IPADIC』に対応する語種情報データで、IPADICに登録されている辞書項目233,624語(形態素)のうち、固有名詞(142,155語)と記号(150語)を除いた、91,319語を語種情報の付与対象としている。この語種情報を利用して、漢語の形態素を抽出した。ただし次のような処理を行った。

- a. 『かたりぐさ』のデータは、形態素解析のために作成されているIPADICに対応しており、1行が「表出形: 読み: 語種」ように構成されている。表出形はどのように表記されているかで、漢語の場合は原則として漢字となる。読みは片仮名で表示され、語種は和語を「和」、漢語を「漢」、混種語を「混」として分類する。このうち、読みが複数採用されているもの(たとえば「各回: カクカイ/カックイ: 漢/漢」などは、「各回: カクカイ: 漢」「各回: カックイ: 漢」のように複数の異なる形態素として取扱った。
- b. 「角: カク/カド/ツノ: 漢/和/和」(形態素: 読み: 語種)のように、漢語以外の語種が同時に指定されているものに関しても、「カク」「カド」「ツノ」を別の形態素として独立させたうえで「カク」のみを抽出した。
- c. 同一の形態素と見られるものが複数出現するものは、一つのみカウントした。例えば「骨: コツ」が二回出現するが、一方のみ抽出した。複数の異体字によって別の形態素とされているもの、踊り字表記と非踊り字表記(堂々/堂堂)も同様に一つのみ抽出した。
- d. 混種語に含まれる漢語音節は、今回の調査では対象としなかった。
- e. 『かたりぐさ』において、「一つの読みで複数の語種が想定される語」(例えば「かば」という形態素に対して「樺」(和語)もしくは「河馬」(漢語)と想定されるもの)と判定されているものについては、今回の調査で採用しなかった。この操作により66語が対象外となった。
- f. 『かたりぐさ』では、語種の判断に『新潮 現代国語辞典(第2版)』が主に利用されている。ただし漢

1) 形態素・語内に並ぶ分節音の配列にみられる規則性に基づき、「一つ、あるいは、複数の分節音を束ねている心的単位(範疇)」(那須川2014)を「音節」とみなす。

2) 音節末に位置する音素Eの成員は頭子音Cの成員と区別するため、大文字で表現する。

3) 詳しくは国立国語研究所の『かたりぐさ』のサイトを参照のこと。

語とされている語の中には、梵語や韓国語由来のものも多く含まれるが、「痘痕、アバタ」「かわら、カワラ」「暹羅、シヤム」「温突、オンドル」など、表出形と読みとが一般的な漢字音の音形から外れているものについては採用せず、「僧、ソウ」「卒塔婆、ソトウバ」などの漢字音として読まれるものについてはそのまま抽出した。また、唐音・宋音の語形も採用した。語形が変化したと考えられるものについても、そのまま採用した(メッキ(滅金の転)、ムクロジ(無患子ムクレニシの転)、マッコウ(末額マッカクの転)など)。

以上の操作によって、漢語として34,574語を抽出した。次にそれを音節ごとに分解し、主母音ごとに延べ音節数を集計した表を作成した。なお今回の調査では、舌内・喉内入声韻尾が開音節化したチ、ツ、キ、クの4つの音節については、形態素の先頭のチ・ツ・キ・クとは別に分けて、括弧に括って示した。

次に主母音ごとに現代語の音節頻度表を掲げ、それぞれについて簡単に特徴を列挙する。まず主母音に/aを持つ音節の、調査対象とした34,574語における使用頻度を示す。

〈表1〉 現代語・主母音/a/音節の頻度

頭子音 韻尾	∅	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m	r	w
∅	206	177 3	622	603	161	347	207	26	462	273	111	198	226	199
R	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
J	115	893	349	593	278	810	469	201	322	134	53	83	184	19
Q	24	84	53	35	34	13	32	4	103	26	0	21	12	0
N	203	129 8	265	650	155	426	369	174	400	276	47	152	220	37
計	548	404 8	128 9	188 1	628	159 6	107 7	405	128 7	709	211	454	642	255

頭子音 韻尾	j	k ^j	g ^j	s ^j	z ^j	t ^j	n ^j	h ^j	b ^j	p ^j	m ^j	r ^j
∅	400	96	51	674	145	148	9	33	10	1	37	71
R	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
J	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Q	8	5	3	8	10	5	0	16	2	0	0	2
N	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	408	101	54	682	155	153	9	49	12	1	37	74

現代漢語音節のうち、主母音にaを持つ音節には次のような特徴が見られる。

- ・韻尾に/R/を許さない。(直音系列、拗音系列とも)
- ・拗音系列は韻尾に/J/を許さない。
- ・拗音系列は韻尾に/N/を許さない。(例外：兩個(リャンコ・唐音))
- ・直音系列において、軽音節と重音節の割合は36%：64%であるのに対して、拗音系列は97%：3%。拗音系列は軽音節が大半を占める(拗音の重音節はすべて、却下、逆光、借金、若干、着火、百科、白狐、略記など、喉内入声韻尾が促音化したもの)。

- ・頭子音で多い(1000以上)のは、/k, s, t, g, h, d/
- ・頭子音で少ない(100以下)のは、/n^j, b^j, m^j, h^j, g^j, r^j, p^j/

主母音が/i/のものについては、口蓋化子音に結合しているものとみなす。また入声韻尾(-k, -t)が開音節化した部分(キ、チ)は形態素の先頭のものとは区別するため、括弧内に示す。

〈表2〉 現代語・主母音/i/音節の頻度

頭子音 韻尾	j	k ^j	g ^j	s ^j	z ^j	t ^j	n ^j	h ^j	b ^j	p ^j	m ^j	r ^j
∅	988	1321 (1297)	413	2078	1209	621 (355)	230	550	256	85	207	586
R(J)	0	0	0	3	0	0	0	2	3	0	0	0
Q	282	26	0	78	64	7	49	46	0	0	26	38
N	434	521	103	1227	460	123	246	114	68	26	127	227
計	1704	3165	516	3389	1733	1106	525	714	330	111	360	851

主母音に/i/を持つ音節には次のような配列上の特徴が見出せる。

- ・/CiR/を基本的に許さない(例外：詩歌、弑虐、鼻眞、判官鼻眞。後述表9参照)。
- ・韻尾に/Q/をとる音節では、「イツ」(jiQ/)が多い。これは形態素「一」が含まれる語が多いことが原因である。
- ・入声韻尾が開音節化したものを除けば、軽音節と重音節の割合は67%：34%
- ・頭子音で多い(1000以上)のは、/s^j, k^j, z^j, j, t^j/(ただしk^j, t^jには、入声音由来のキ・チが多く含まれる)。
- ・頭子音で少ない(100以下)ものは特にない。

次に主母音にuを持つ音節について集計する。括弧内は主母音/i/の表と同様に、入声韻尾(-k, -t)が開音節化した部分(ク、ツ)である。

〈表3〉 現代語・主母音/u/音節の頻度

頭子音 韻尾	∅	k	g	s	z	t	n	h	b	p	m	r
∅	126	263 (6081)	115	46	83	6 (2983)	3	968	497	128	345	38
R	0	95	64	170	10	145	0	183	1	28	0	0
J	2	0	0	427	58	63	0	1	0	0	0	136
Q	8	14	0	0	0	0	0	23	50	0	0	0
N	140	105	139	36	3	0	1	114	429	20	0	0
計	276	6558	318	679	154	3197	4	1289	978	176	345	174
頭子音 韻尾	j	k ^j	g ^j	s ^j	z ^j	t ^j	n ^j	h ^j	b ^j	p ^j	m ^j	r ^j
∅	106	0	0	772	345	0	0	0	0	0	0	0

R	426	578	34	612	353	426	187	0	3	0	0	253
J	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Q	0	0	0	60	10	0	0	0	0	0	0	0
N	0	0	0	94	189	0	0	0	0	0	0	0
計	543	578	34	1538	897	426	187	0	3	0	0	253

上表の特徴として次のような諸点を指摘できる。

- ・拗音系列には韻尾に/R/をとる音節が多く使用される(有・休・舟・中・入・留・謬···)。特に/kj gi tj nj bj rj/に関しては、韻尾のない軽音節はなく、韻尾に/R/を取る(肥爪2001参照)。
- ・韻尾にJを許さない傾向が強い(例外/suJ/水、/zuJ/随随、/tuJ/追対墜、/ruJ/類涙星、/huJ/吹聴(風聴の転か)、/juJ/唯遺、/uJ/外郎(ウイロウ・唐音))。
- ・拗音系列には/sjuN/(春、俊、峻、瞬、逡、駿···)/zjuN/(旬、準、順、純···)以外の/N/は付きにくい。直音系列でも/tuN, muN, ruN, zuN, nuN/はない。
- ・入声韻尾が開音節化したものを除けば、直音系列は軽音節と重音節の割合が52% : 48%であるのに対して、拗音系列は27% : 73%。
- ・頭子音で多い(1000以上)のは、/k, t, s^j, h/(ただし/k, t/はほとんどが入声由来のク・ツ)
- ・頭子音で少ない(100以下)のは、/g^j, n, b^j, h^j, m^j, p^j/

次に主母音に/e/を持つ音節について述べる。エイ(永・英・影···)、ケイ(敬・掲・計···)など、主母音eに母音性の韻尾が結合している音節については、[e:] [ei]の双方で実現することがあるが、どちらも/eR/として判断した。

〈表4〉 現代語・主母音/e/音節の頻度

頭子音 韻尾	∅	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m	r
∅	225	289	317	727	76	280	9	68	59	88	18	45	159
R(J)	272	742	72	1478	80	486	19	11	290	37	33	415	374
Q	7	105	35	127	37	64	1	28	0	45	0	10	31
N	547	756	623	999	500	622	282	294	273	118	35	197	221
計	1051	1892	1047	3331	693	1452	311	401	623	288	86	667	785

同様に上表の特徴を述べる。

- ・他の主母音と比べると、すまもなく分布し、偏りが小さい。
- ・軽音節と重音節の割合は19% : 81%
- ・頭子音で多い(1000以上)のは、/s, k, t, ∅, g/。特に/seR/(セイ)が多用される。
- ・頭子音で少ない(100以下)のは、/p^j/

最後に、主母音に/o/を持つ音節について見る。

〈表5〉現代語・主母音/o/音節の頻度

頭子音 韻尾	∅	k	g	s	z	t	d	n	h	b	p	m	r
∅	65	841	590	601	217	449	396	3	199	314	34	208	258
R	251	2042	287	978	269	992	721	286	736	419	114	153	333
J	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
Q	3	49	1	28	13	37	11	0	20	17	0	20	20
N	242	273	39	151	26	39	41	12	237	58	40	229	146
計	561	3205	917	1758	525	1517	1169	301	1194	808	188	610	757
頭子音 韻尾	j	k ^j	g ^j	s ^j	z ^j	t ^j		n ^j	h ^j	b ^j	p ^j	m ^j	r ^j
∅	279	411	160	951	266	143		31	0	0	0	0	217
R	716	700	237	1364	873	697		26	215	170	31	100	510
J	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0
Q	5	7	1	16	0	21		0	0	0	0	0	1
N	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0
計	1000	1118	398	2331	1139	861		57	215	170	31	100	728

- ・直音系列、拗音系列とも、韻尾には/J/を許さない(例外：陪ホイ(唐音))。
- ・拗音系列は韻尾に/N/を許さない。直音系列でも/noN/は少ない(例外：観音(連声)、暖気(唐音)など)。
- ・/h^j, b^j, p^j, m^j/については、必ず/R/つき重音節として現れる。
- ・/no/が少ない(近衛コノエ(コンエの転)、近衛府コノエフ、暖簾ノレン(ノン(唐音)の転)のみ。) 同様に、喉内入声韻尾字を除けば、/zo/(例外：先祖、典座テンゾ(唐音))も少ない。
- ・直音系列は、軽音節と重音節の割合が31%：69%であるのに対し、拗音系列は30%：70%となる。
- ・頭子音で多い(1000以上)のは、/k, s^j, s, t, h, d, z^j, k^j, j/
- ・頭子音で少ない(100以下)のは、/n^j, p^j/

さらに頭子音の成員による違いを無視してこれまでの5つの表をまとめると、次のようになる。

〈表6〉『かたりぐさ』データに出現する音節の頻度

		非口蓋化子音(直音系列)					口蓋化子音(拗音系列)						
		CV	CVR	CVJ	CVQ	CVN	計	CjV	CjVR	CjVJ	CjVQ	CjVN	計
主 母 音	a	5414 (36%)	0	4503 (30%)	441 (3%)	4672 (31%)	15030 (100%)	1675 (97%)	0	0	59 (3%)	1 (0.1%)	1735 (100%)
	i						8544 (67%)	8 (0.1%)			616 (5%)	3676 (29%)	12844 (100%)
	u	2618 (52%)	696 (14%)	687 (14%)	95 (2%)	987 (19%)	5083 (100%)	1223 (27%)	2872 (64%)	11 (0.2%)	70 (2%)	283 (6%)	4459 (100%)
	e	2360 (19%)	4309 (34%)		490 (4%)	5467 (43%)	12626 (100%)						
	o	4175 (31%)	7581 (56%)	2 (0.01%)	219 (2%)	1533 (11%)	13510 (100%)	2458 (30%)	5639 (69%)	0	51 (1%)	0	8148 (100%)

この調査より、現代漢語の音節について次の点が確認される。

・漢語音節における韻尾Eは、前に位置する母音および子音についての制限がある。例外はあるが、おおむねR/は/a, i/に後接せず、/l/は/i, o, Cⁱu, Cⁱa/に後接せず、N/は/Cⁱa, Cⁱo/に後接しない傾向が強い。

・軽音節(CV、V)と重音節(CVE、VE)の割合を見ると、軽音節が多いのはア列拗音、イ列、ウ列直音であり、その他は概して重音節の使用頻度が高い。

2. 院政期末における漢語形態素を構成する音節の音素配列

ここでは、漢語音節がそのような外来の要素を受容するための試行錯誤を経た後、拗音や撥音、入声音が一定の仮名書形で定着したと見られる院政期末において⁴⁾、漢語音節がどのように構成されていたかを概観する。個々の音価については不明なところも多いが、ここでは詳しい音価については踏み込まず、弁別される音節の構造と種類のみを問題とする。

12世紀中頃の漢語音節は次の構造を持っており、それぞれの成員は次のようなものであったと考える。

4) 「いずれにしても平安初期の時点では拗音音節の音韻としての認識はまだ日本側では不十分であったらしい。総じて、拗音を含めて、この時期は中国語音をどう受け入れ日本語の音韻体系に純化させるか—換言すれば仮名でどう書いて書き言葉として受け入れるか—の試行錯誤の時期であったであろう。この様な変換の絶対的な年代を決定することは出来にくい、入声音・撥音と共に拗音の仮名表記が一応の定着を見せているのは院政末期であり、この時期一一五〇年頃には大旨その変換が完了していたと見る事は出来ようである」(沼本2014: 63)

CVE(頭子音+主母音+韻尾)

C: 非口蓋化子音(直音系列)C /k, ŋ, s (~ts), ^hz (~^hdz), t, ^hd, n, Φ, ^hb, m, r, w/

口蓋化子音(開拗音系列)Cj /j, k^j, ŋ^j, s^j (~ts^j), ^hz^j (~^hdz^j), t^j, ^hd^j, ^hj, Φ^j, ^hb^j, m^j, r^j/

円唇化子音(合拗音系列)Cw /w, k^w, ŋ^w, (w^j), (k^{wj}), (s^w), (z^w)/⁵⁾

V: /a, i, u, e, o/

E: / W(母音韻尾-u)⁶⁾, J(母音韻尾-i), T(舌内入声韻尾-tおよび促音)

M(唇内鼻音韻尾-m), N(舌内鼻音韻尾-n), ^hG(喉内鼻音韻尾-ŋ)/

呉音の体系として『観智院本類聚名義抄』の和音(以下『名義抄』)、漢音の体系として『長承本蒙求』(以下『蒙求』)を取り上げ、まずは別々に所載字の音節分布についてまとめる⁷⁾。

- ・『名義抄』の清濁の判断について、複声点、濁音仮名、仮名右肩の記号「レ」があるものは濁音とした。これらがないものは清濁を厳密に確定できないが、仮に中古音の声母の推定音価によって決定した。なお複声点、濁音仮名、記号「レ」によって濁音であることが明らかでない例には下線を付した(沼本1982: 551による)。『蒙求』については、所載の秦音の体系に依って清濁を判断した。
- ・韻尾の仮名音形「ウ」については、記号「レ」が付されていなくても原音が喉内鼻音韻尾を有していれば⁸⁾Gと判断した。
- ・仮名音形のわかるものを採取した。類音字や「同」とあるものは採らなかった。
- ・『名義抄』において漢音形の混入と見られるもの、『蒙求』において呉音の混入と見られるものについても採取した。
- ・『名義抄』については、撥音韻尾はすでに「ン」と「ム」の混乱が見られる(沼本1982: 564)が、そのまま「ン」をN、「ム」をMとした。ただし、中古音の推定音価と異なるものについては、波線を付した(下線と同じ場所に付す必要がある場合は二重の下線を施した)。
- ・入声韻尾については開音節化の度合に関して幅を認める論が提出されているが(佐々木2008など)、ここでは喉内入声音-kは一律に開音節化して-ki、-kuとなり、独立した音節を形成していると仮定している。したがって、表では韻尾を取り除いた部分について分類し(例えば「木」はmoの欄に入っている)、韻尾∅の欄の二段目に配した。一方、韻尾部分に関しては別の音節としてkⁱ、kuの欄に計上する。舌内入声音は-tのまま閉音節を保っていると見、当該字を韻尾/T/の欄に分類した。唇内入声音は-p) -pu) -Φuという過程を経てuに合流しているとみなし、該当字は韻尾/W/の欄に入れてある。
- ・開拗音についてはその成立の時期を正確に確定することは難しく、開拗音の成立を遅く見る説もある⁸⁾。この問題に関しても、中国語に近い頭子音と口蓋音要素が融合的な状態(去^{キヨ}

5) (w^j), (k^{wj}), (s^w), (z^w)はそれぞれ、鷹^{キヤウ}、匡^{クキヤウ}、遵^{スキン}、潤^{シキン}等を指すが、散発的にしか見られず、音韻としては独立していない一時的なものと捉える。

6) 小林(1971)によれば、片仮名文においては、-euと-jouが長音化した結果、仮名遣いの混乱した例が院政期から見えることが指摘されているが、本稿では漢字音の世界における書き分けを重視して長音化が起こる前の音韻体系を想定し、異なる音節として処理している。

7) 用例の採取にあたっては、沼本(1995)および沼本(1997)所載の分韻表を使用した。一字に同じ字音形が複数回現れる場合は一回のみカウントしている。

[k'o]から和語に近い分離的な状態([k'i.jo])との間で幅を持って実現していたと考えられる。本稿では院政期末にいて、借用語の音韻体系として和語の影響が小さい段階を想定し、/kⁱ, ŋⁱ, sⁱ…/と表現する。

・我^{カア}など、いわゆる長呼形は韻尾^oの欄の最下段に振り仮名とともに表示した。

・次のような下線を施した。

— : 濁音であることが複声点、濁音仮名、記号「レ」によって示されているもの。

~~~~ : 中古音で-mのものに対して「ン」となっているもの。あるいは中古音で-nのものに対して「ム」となっているもの。

== : 上記二つの条件が重なっているもの。

以上のような要領によって、『名義抄』ならびに『蒙求』の音節表を主母音ごとに作成した。紙幅の都合により、『名義抄』の主母音/a/をもつ音節について整理した表のみを次に掲げ、他の表は割愛する。

〈表7〉『観智院本類聚名義抄』和音において主母音/a/を持つ字

| 頭子音<br>韻尾 | ∅           | k              | ŋ              | s                                           | <sup>n</sup> z       | t                               | <sup>n</sup> d            | n        | Φ        | <sup>n</sup> b | m              | r             |
|-----------|-------------|----------------|----------------|---------------------------------------------|----------------------|---------------------------------|---------------------------|----------|----------|----------------|----------------|---------------|
| ∅         | 阿<br>唾      | 珂佉<br>訶哥<br>可駕 | 何河<br>荷餓<br>暇  | 左瑳<br>佐磋<br>詐                               | 唵                    | 多他<br>須埵                        | 駝陀<br>墮駄                  | 那邪       | 波跛把<br>破 | 婆芭<br>雹        | 摩魔<br>磨        | 裸邏            |
|           | 惡           | 壑却             | 學額             | 捉作<br>迕                                     | 坐 <sup>サア</sup>      | 吒斷                              | 鐸擲                        |          | 搏迫伯<br>陌 | 薄縛             | 莫幕             | 樂             |
| W         | 奧<br>罽      | 高邀<br>甲鉀<br>怯  | 豪皞<br>厚號<br>合洽 | 糟窠<br>巢草<br>瓜巾<br>颯                         | 造雜                   | 刀討<br>踰                         | 道稻<br>導                   | 惱納       |          | 茅飽<br>疱        | 貌              | 勞鑽            |
| J         | 哀<br>覿<br>隘 | 皆海<br>慨界<br>蓋  | 姦崖<br>嗶駭<br>械害 | 栽灾<br>猜悒<br>賣妻<br>齊彩<br>濟碎<br>碎歲<br>細最<br>取 | 哉才<br>賤摧<br>齊吡<br>罪鯖 | 胎堆<br>推待<br>體體<br>戴對<br>退帶<br>泰 | 臺頽<br>啼提<br>逮滯<br>第達<br>大 | 乃内<br>涅捺 | 配拜       | 敗喞             | 玫每<br>米買<br>邁賣 | 來禮<br>昧戾<br>癩 |

8) 「キユウ」「ニユウ」などの表記が見え始める南北朝時代頃には、この音節組織の組み替えが起こり、拗音は日本語に完全に定着し、和語にも次第に波及していった(肥爪2005)、「キャ・キュ・ギヤ・ギユ等が日本語音として確立するのはけっこう新しい時代に属する可能性がある」(高山2003)など。

|                |                          |                            |                                                 |                                                              |                                       |                |                             |                |                |                             |                |                     |
|----------------|--------------------------|----------------------------|-------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|---------------------------------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|---------------------|
| T              | 遏                        | 歇渴<br>遏                    | 蝸                                               | 擦薩<br>寒                                                      |                                       |                | 咄                           |                | 颺八             |                             | 末              | 粹                   |
| M              | 菴淹<br>掩闔                 | 艱堪<br>甘感<br>坎敢<br>陷缺       | 龕含<br>巖                                         | 疹                                                            | 慙暫<br>暫                               | 耽擔<br>痰        | 噉擔<br>暖                     | 暖              |                | 汎                           | 蕙              | 藍                   |
| N              |                          | 或乾<br>寒幹                   | 瘡                                               | 冊傘<br>竄                                                      | 餐殘                                    | 端擔<br>短歎       | 檀但<br>斷袒<br>段               | 難奕<br>煖        | 幡半             | 盤槃<br>伴                     | 滿蔓<br>慢        | 嬾卵<br>亂             |
| <sup>n</sup> G | 嬰映                       | 糠僵<br>壘香<br>講響<br>彊向       | 降剛<br>強迎<br>恒仰<br>幸<br>江 <small>カア</small><br>ウ | 倉瘡<br>想喪<br>壯相                                               | 倉藏<br>象尚                              | 當黨             | 堂                           | 襠              | 方放<br>訪        | 房誘<br>電                     | 望萌蟒<br>網網<br>望 | 狼良<br>浪             |
| 頭子音<br>韻尾      | j                        | k <sup>j</sup>             | ŋ <sup>j</sup>                                  | s <sup>j</sup>                                               | <sup>n</sup> z <sup>j</sup>           | t <sup>j</sup> | <sup>n</sup> d <sup>j</sup> | n <sup>j</sup> | ϕ <sup>j</sup> | <sup>n</sup> b <sup>j</sup> | m <sup>j</sup> | r <sup>j</sup>      |
| ∅              | 耶夜<br><br>鑰厄<br>益亦<br>役疫 | 却客                         | 劇逆<br>獲                                         | 蹉娑<br>摠遮<br>車耶<br>灑炙<br>舍<br>蹙蹙<br>錯斫<br>綽嚼<br>責策<br>借赤<br>蹙 | 蛇闇<br>斜社<br>射<br><br>籍席<br>寂          | 圻              | 蒼擇<br>笛歛<br>敵蹙              | 若弱             | 百璧             | 辟                           | 藐覓             | 略歷                  |
| W              |                          |                            |                                                 |                                                              |                                       |                |                             |                |                |                             |                |                     |
| J              |                          |                            |                                                 |                                                              |                                       |                |                             |                |                |                             |                |                     |
| T              |                          |                            |                                                 |                                                              |                                       |                |                             |                |                |                             |                |                     |
| M              |                          |                            |                                                 |                                                              |                                       |                |                             |                |                |                             |                |                     |
| N              |                          |                            |                                                 |                                                              |                                       |                |                             |                |                |                             |                |                     |
| <sup>n</sup> G | 嬰盈<br>養永                 | 坑經<br>形哽<br>譬更<br>竟慶<br>徑逕 | 行莖<br>競                                         | 狂裝<br>章生<br>正清<br>聲青<br>星障<br>鄣賞<br>請壯<br>唱政<br>精聖           | 床牆<br>常詳<br>情上<br>壤靜<br>狀讓<br>諍淨<br>盛 | 張貞<br>騁帳<br>悵聽 | 長丈<br>定                     |                | 兵并<br>俦跽       | 瓶並<br>病                     | 明名<br>冥猛<br>命  | 量涼<br>靈伶<br>冷兩<br>魑 |

| 頭子音<br>韻尾      | w        | k <sup>w</sup> | ŋ <sup>w</sup> | w <sup>j</sup>          | k <sup>wj</sup>                             | ŋ <sup>wj</sup>                             |
|----------------|----------|----------------|----------------|-------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------|
| ∅              | 和汚凹      | 啗蝸火寡<br>過      | 寡瓦臥            | 役 <small>キヤウ(ワ)</small> |                                             |                                             |
|                | 惑        | 郭              |                | 疫 <small>キヤク</small>    |                                             |                                             |
| W              |          |                |                |                         |                                             |                                             |
| J              | 猥穢       | 魁絀憤塊           | 潰              |                         |                                             |                                             |
| T              | 曰        |                |                |                         |                                             |                                             |
| M              |          |                |                |                         |                                             |                                             |
| N              | 腕        | 官觀歡卷<br>勸貫煥喚   | 桓寰             |                         |                                             |                                             |
| <sup>n</sup> G | 狂横往<br>誑 | 光廣礦鑛<br>曠      |                | 榮 <small>キヤウ</small>    | 頃 <small>クキヤウ</small> 況 <small>クキヤウ</small> | 迴 <small>クキヤウ</small><br>詠 <small>ウ</small> |

さて、以上の手続きで作成された音節表は、呉音体系と漢音体系を別個に捉え、それぞれの音韻組織を観察したものであった。次に両者を一体として捉えた場合どうなるかという点を確認してみたい。平安時代における知識音としての漢字音は、より正確な漢籍や仏典の読誦のなかで漢音と呉音が区別されてきたのが実際であるが、一方で両者はしばしば混同されるのも事実である。借用語としての漢語に適用される音韻体系は、呉音と漢音を別の層として受け入れたが、徐々に日常語彙に受け入れられていくなかで、一方の音が支配的になったり、一方に完全に統合されていった(小松1995)。結果として現代では、呉音と漢音は異なる音韻体系と意識されず、語彙によってどちらが使用されるかが決定されるという状態になっている。ここでは現代語への流れを把握するため、呉音と漢音との統合の初期の段階における両者の総体を想定し、資料に現れる仮名音形から、各音節に所属する字がどれくらいあるかを求めた表を作成した。

以下の表は、先に作成した『名義抄』の音節表と『蒙求』の音節表に出現する漢字の数を単純に足したものである。したがって、呉音と漢音が同形の場合は、双方ともカウントされることになる。また先に掲げた現代語の『かたりぐさ』の頻度表とは性格を異にしていることに注意されたい<sup>9)</sup>。なお、カ行・ガ行以外の合拗音、jとw双方を反映させた音形は、臨時的なものとして割愛した。

まず、主母音に/aを持つものは次の通りである。

9) 『かたりぐさ』においては、辞書における語を単位として採集しているため、同じ字が繰り返し現れる。よって一つの欄に記載された数字は辞書の見出し語において該当音節が使用された頻度を表している。対して『観智院本名義抄』と『長承本蒙求』の調査では分韻表を元に作成しているため、同じ字が繰り返し現れることは基本的になく、一つの欄に記載される数字は異なり字数となる(ただし呉音と漢音は別にカウントされる)。

〈表8〉院政期末・主母音/a/音節の所属字数

| 頭子音<br>韻尾      | ∅  | k              | ŋ              | s              | <sup>n</sup> z              | t              | <sup>n</sup> d              | n              | Φ              | <sup>n</sup> b              | m              | r              |
|----------------|----|----------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|
| ∅              | 4  | 31             | 12             | 19             | 2                           | 14             | 7                           | 2              | 26             | 9                           | 5              | 4              |
| W              | 2  | 18             | 7              | 16             | 2                           | 12             | 3                           | 2              | 3              | 3                           | 1              | 4              |
| J              | 3  | 17             | 9              | 21             | 8                           | 21             | 9                           | 4              | 7              | 6                           | 6              | 8              |
| T              | 1  | 8              | 1              | 5              | 0                           | 2              | 1                           | 0              | 4              | 0                           | 1              | 1              |
| M              | 5  | 17             | 3              | 5              | 3                           | 13             | 2                           | 2              | 4              | 1                           | 1              | 2              |
| N              | 2  | 13             | 3              | 10             | 2                           | 14             | 5                           | 3              | 13             | 4                           | 5              | 5              |
| <sup>n</sup> G | 3  | 21             | 9              | 16             | 4                           | 3              | 1                           | 3              | 8              | 4                           | 10             | 5              |
| 頭子音<br>韻尾      | j  | k <sup>j</sup> | ŋ <sup>j</sup> | s <sup>j</sup> | <sup>n</sup> z <sup>j</sup> | t <sup>j</sup> | <sup>n</sup> d <sup>j</sup> | n <sup>j</sup> | Φ <sup>j</sup> | <sup>n</sup> b <sup>j</sup> | m <sup>j</sup> | r <sup>j</sup> |
| ∅              | 14 | 4              | 4              | 32             | 8                           | 2              | 6                           | 2              | 2              | 1                           | 2              | 2              |
| W              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| J              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| T              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| M              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| N              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| <sup>n</sup> G | 8  | 14             | 3              | 33             | 15                          | 8              | 3                           | 0              | 4              | 3                           | 5              | 11             |
| 頭子音<br>韻尾      | w  | k <sup>w</sup> | ŋ <sup>w</sup> |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| ∅              | 5  | 25             | 4              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| W              | 0  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| J              | 2  | 11             | 1              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| T              | 1  | 2              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| M              | 0  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| N              | 1  | 24             | 3              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| <sup>n</sup> G | 5  | 9              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |

上の表より、次のことが分布上の特徴として見出される。

- ・開拗音系列の重音節は、喉内鼻音韻尾<sup>n</sup>G/が付く音節以外、出現しない。
- ・表には現れないが、開拗音系列の軽音節(/<sup>j</sup>a, k<sup>j</sup>a, ŋ<sup>j</sup>a…/)のほとんどは喉内入声韻尾字の1音節目であり、それ以外の軽音節はヤ行、サ行、ザ行の開拗音軽音節(耶・車・蛇…))に限られる。

開拗音系列の重音節が少ないのは、蟹撰、山撰、效撰に属する字において、直音韻はア列、拗音韻はエ列で転写されるという、日本語側の受容の仕方による。一方で開拗音系列の喉内入声字以外の軽音節が少ないのは、假撰麻韻拗(-ia)には、サ・ザ・ヤ行に関わる子音(照母、穿母、神母、審母、心母、禪母、邪母、喻母)しか結合しないという中国語側の分布の影響と考えられる。

次に主母音にiを持つ漢字音の構造を見る。なお表には、喉内入声韻尾が開音節化したk<sup>i</sup>は含まれていない(表10におけるkuも同様)。

〈表9〉 院政期末・主母音iの所属字数

| 韻尾 \ 頭子音       | j  | k <sup>j</sup> | ŋ <sup>j</sup> | s <sup>j</sup> | <sup>n</sup> z <sup>j</sup> | t <sup>j</sup> | <sup>n</sup> d <sup>j</sup> | n <sup>j</sup> | Φ <sup>j</sup> | <sup>n</sup> b <sup>j</sup> | m <sup>j</sup> | r <sup>j</sup> |
|----------------|----|----------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|
| ∅              | 20 | 35             | 10             | 76             | 11                          | 25             | 5                           | 9              | 21             | 10                          | 7              | 15             |
| W              | 8  | 9              | 2              | 32             | 3                           | 15             | 2                           | 2              | 0              | 0                           | 0              | 7              |
| J              | 1  | 1              | 0              | 1              | 1                           | 1              | 0                           | 0              | 2              | 2                           | 0              | 1              |
| T              | 3  | 5              | 0              | 10             | 2                           | 1              | 0                           | 1              | 6              | 1                           | 1              | 3              |
| M              | 3  | 7              | 1              | 12             | 3                           | 3              | 1                           | 2              | 0              | 1                           | 0              | 5              |
| N              | 7  | 5              | 1              | 18             | 5                           | 4              | 0                           | 3              | 4              | 5                           | 3              | 8              |
| <sup>n</sup> G | 5  | 1              | 0              | 6              | 0                           | 3              | 2                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 2              |

  

| 韻尾 \ 頭子音       | w  | k <sup>w</sup> | ŋ <sup>w</sup> |
|----------------|----|----------------|----------------|
| ∅              | 10 | 12             | 5              |
| W              | 0  | 0              | 0              |
| J              | 0  | 0              | 0              |
| T              | 1  | 2              | 0              |
| M              | 0  | 0              | 0              |
| N              | 2  | 2              | 0              |
| <sup>n</sup> G | 0  | 1              | 0              |

ここから次の特徴が見出される。

・/CiI/を基本的に許さない。(例外：熯キイ、時シイ、智チイ、毗ヒイ、備ヒイ)

これらは日本語音韻体系において長短が弁別的でなかった時代における長呼形が偶然掬い取られて化石化したものとされる(沼本1997)。

〈表10〉 院政期末・主母音/u/の所属字数

| 韻尾 \ 頭子音       | ∅  | k  | ŋ  | s  | <sup>n</sup> z | t | <sup>n</sup> d | n | Φ  | <sup>n</sup> b | m | r |
|----------------|----|----|----|----|----------------|---|----------------|---|----|----------------|---|---|
| ∅              | 13 | 20 | 11 | 9  | 0              | 0 | 0              | 2 | 29 | 18             | 7 | 2 |
| W              | 0  | 0  | 0  | 5  | 3              | 0 | 0              | 0 | 0  | 0              | 0 | 0 |
| J              | 0  | 0  | 0  | 15 | 5              | 4 | 1              | 0 | 0  | 0              | 0 | 2 |
| T              | 0  | 5  | 0  | 1  | 0              | 0 | 0              | 0 | 0  | 1              | 0 | 0 |
| M              | 0  | 0  | 0  | 0  | 0              | 0 | 0              | 0 | 0  | 1              | 0 | 0 |
| N              | 5  | 5  | 2  | 7  | 1              | 0 | 0              | 0 | 8  | 5              | 0 | 0 |
| <sup>n</sup> G | 1  | 9  | 4  | 1  | 0              | 2 | 0              | 0 | 4  | 2              | 2 | 0 |

  

| 韻尾 \ 頭子音       | j | k <sup>j</sup> | ŋ <sup>j</sup> | s <sup>j</sup> | <sup>n</sup> z <sup>j</sup> | t <sup>j</sup> | <sup>n</sup> d <sup>j</sup> | n <sup>j</sup> | Φ <sup>j</sup> | <sup>n</sup> b <sup>j</sup> | m <sup>j</sup> | r <sup>j</sup> |
|----------------|---|----------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|
| ∅              | 4 | 0              | 0              | 13             | 3                           | 2              | 1                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| W              | 1 | 0              | 0              | 1              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| J              | 1 | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| T              | 0 | 0              | 0              | 2              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| M              | 0 | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| N              | 0 | 0              | 0              | 3              | 5                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| <sup>n</sup> G | 1 | 0              | 0              | 2              | 3                           | 0              | 2                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |

主母音として/u/を持つ音節の特徴は次の通りである。

- ・頭子音が限定され、まったく所属字がないものも多い(/k<sup>j</sup>, ŋ<sup>j</sup>, n<sup>j</sup>, Φ<sup>j</sup>, nb<sup>j</sup>, m<sup>j</sup>, r<sup>j</sup>/)。
- ・直音系列において、軽音節の所属字のない頭子音がある(/<sup>n</sup>zu, tu, <sup>n</sup>du/)。
- ・韻尾/J/は、/suJ, <sup>n</sup>zuJ, tuJ, <sup>n</sup>duJ/を除いて現れない。
- ・韻尾/M/はほぼ現れない(例外：空<sup>n</sup>buM/)。
- ・開拗音系列においては、韻尾/N/が少ない(/s<sup>j</sup>uN, z<sup>j</sup>uN/を除く)。直音系列でも/tuN, <sup>n</sup>duN, nuN, muN, ruN/はない。
- ・開拗音系列においては、韻尾/W/が少ない(例外：庾<sup>ユウ</sup>、朱<sup>シュウ</sup>)。

このうち3点目の韻尾/J/については、これらの母音ウが中国語原音で主母音uに由来するものでなく、止摂合口字(-i<sup>w</sup>ě, -i<sup>w</sup>ê, -i<sup>w</sup>i, -i<sup>w</sup>i)の合口性を反映するものであるため、現れにくいということとなろう。韻尾/M/および/N/が現れにくいことは、中国語原音で-um, -unが分布上のあきまとなっているが理由と考えられる。また、現代語では拗音系列に韻尾に/R/をとる音節が多く使用される(有・休・…)が、受容当初は韻尾/W/がほとんど現れない(/<sup>n</sup>G/も少ない)。したがって現代語の/C<sup>j</sup>uR/の多くは受容後の音韻変化によってウ列に流れてきたものが大半を占めるということになる。

次に主母音として/e/を持つものを見る。

〈表11〉 院政期末・主母音/e/の所属字数

| 頭子音<br>韻尾      | k  | ŋ              | s <sup>j</sup> | <sup>n</sup> z <sup>j</sup> | t  | <sup>n</sup> d | n  | Φ  | <sup>n</sup> b | m | r  |  |
|----------------|----|----------------|----------------|-----------------------------|----|----------------|----|----|----------------|---|----|--|
| ∅              | 14 | 8              | 14             | 1                           | 6  | 1              | 0  | 4  | 0              | 1 | 2  |  |
| W              | 14 | 5              | 20             | 1                           | 9  | 2              | 11 | 6  | 3              | 4 | 5  |  |
| J              | 26 | 3              | 27             | 4                           | 20 | 2              | 5  | 10 | 4              | 3 | 5  |  |
| T              | 4  | 1              | 11             | 2                           | 6  | 1              | 1  | 2  | 3              | 2 | 2  |  |
| M              | 9  | 5              | 11             | 4                           | 2  | 2              | 0  | 2  | 1              | 0 | 3  |  |
| N              | 18 | 9              | 28             | 7                           | 8  | 2              | 3  | 12 | 3              | 6 | 10 |  |
| <sup>n</sup> G | 0  | 0              | 0              | 0                           | 0  | 0              | 0  | 1  | 0              | 0 | 0  |  |
| 頭子音<br>韻尾      | j  |                |                |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| ∅              | 6  |                |                |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| W              | 11 |                |                |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| J              | 12 |                |                |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| T              | 1  |                |                |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| M              | 7  |                |                |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| N              | 17 |                |                |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| <sup>n</sup> G | 1  |                |                |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| 頭子音<br>韻尾      | w  | k <sup>w</sup> | ŋ <sup>w</sup> |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| ∅              | 6  | 10             | 2              |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| W              | 0  | 0              | 0              |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |
| J              | 4  | 2              | 0              |                             |    |                |    |    |                |   |    |  |

|                |   |    |    |
|----------------|---|----|----|
| T              | 0 | 4  | 1  |
| M              | 0 | 0  | 1  |
| N              | 5 | 14 | 11 |
| <sup>n</sup> G | 0 | 0  | 0  |

主母音が/e/である音節の特徴には次のようなものが挙げられる。

・韻尾に<sup>n</sup>G/を有するものが少ない。

最後に主母音として/o/を持つ音節について述べる。

〈表12〉 院政期末・主母音/o/の所属字数

| 頭子音<br>韻尾      | ∅  | k              | ŋ              | s              | <sup>n</sup> z              | t              | <sup>n</sup> d              | n              | ϕ              | <sup>n</sup> b              | m              | r              |
|----------------|----|----------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|-----------------------------|----------------|----------------|
| ∅              | 1  | 36             | 18             | 30             | 2                           | 14             | 4                           | 0              | 13             | 13                          | 3              | 13             |
| W              | 3  | 9              | 4              | 6              | 0                           | 5              | 0                           | 1              | 7              | 6                           | 1              | 3              |
| J              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| T              | 0  | 11             | 1              | 3              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 2              | 0                           | 1              | 0              |
| M              | 4  | 3              | 2              | 1              | 0                           | 3              | 1                           | 0              | 2              | 3                           | 1              | 0              |
| N              | 1  | 7              | 6              | 3              | 2                           | 3              | 1                           | 0              | 5              | 3                           | 4              | 2              |
| <sup>n</sup> G | 6  | 11             | 4              | 12             | 2                           | 13             | 5                           | 2              | 11             | 1                           | 2              | 1              |
| 頭子音<br>韻尾      | j  | k <sup>j</sup> | ŋ <sup>j</sup> | s <sup>j</sup> | <sup>n</sup> z <sup>j</sup> | t <sup>j</sup> | <sup>n</sup> d <sup>j</sup> | n <sup>j</sup> | ϕ <sup>j</sup> | <sup>n</sup> b <sup>j</sup> | m <sup>j</sup> | r <sup>j</sup> |
| ∅              | 13 | 12             | 5              | 30             | 2                           | 9              | 4                           | 3              | 0              | 0                           | 0              | 8              |
| W              | 1  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| J              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| T              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| M              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| N              | 0  | 0              | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0                           | 0              | 0              | 0                           | 0              | 0              |
| <sup>n</sup> G | 8  | 3              | 0              | 19             | 2                           | 2              | 0                           | 0              | 1              | 0                           | 0              | 2              |
| 頭子音<br>韻尾      | w  | k <sup>w</sup> | ŋ <sup>w</sup> |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| ∅              | 1  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| W              | 0  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| J              | 0  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| T              | 1  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| M              | 0  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| N              | 7  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |
| <sup>n</sup> G | 1  | 0              | 0              |                |                             |                |                             |                |                |                             |                |                |

主母音として/o/を持つ音節の特徴は次の通りである。

・直音系列、開拗音系列とも、韻尾には/J/を許さない。

- ・開拗音系列は韻尾に/N, M, W/を許さない(例外は餘ヨウ(蒙求)のみ)。
- ・直音系列の軽音節のうち、/no/が少ない。同様に、喉内入声韻尾字を除けば、/zo/も少ない。

一点目の/J/に関する制限について言えば、中国語にoiがないことが主因である。ただし止摂の一部に-aiがあるが、イ列で転写される。二点目の韻尾に鼻音韻尾/N, M/を取らないのも、中国語にon, omがなく、-ən(臻摂痕韻-ən、魂韻-wən)、-əm(深摂侵韻-əm)は限られることによる。三点目のノ、ゾの少なさも、中国語側にそのように音写されるような組み合わせがなかったことが理由と考えられる。

以上を頭子音の違いを無視してまとめると、次の通りとなる(所属字の少ない音節を網掛けとする)。

〈表13〉『類聚名義抄』『長承本蒙求』に出現する音節の頻度

| 直音系列  |          | CV               | CVW               | CVJ               | CVT               | CVM               | CVN               | CV <sup>n</sup> G               | 計         |
|-------|----------|------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------------------------------|-----------|
|       | a        | 135(24%)         | 73(13%)           | 119(21%)          | 24(4%)            | 58(10%)           | 79(14%)           | 87(15%)                         | 575(100%) |
| i     |          |                  |                   |                   |                   |                   |                   |                                 |           |
| u     | 111(52%) | 8(4%)            | 27(13%)           | 7(3%)             | 1(0.5%)           | 33(16%)           | 25(12%)           | 212(100%)                       |           |
| e     | 51(12%)  | 80(19%)          | 109(26%)          | 35(8%)            | 39(9%)            | 106(25%)          | 1(0.2%)           | 322(100%)                       |           |
| o     | 147(44%) | 45(13%)          | 0                 | 18(5%)            | 20(6%)            | 37(11%)           | 70(21%)           | 337(100%)                       |           |
| 開拗音系列 |          | C <sup>v</sup> V | C <sup>v</sup> VW | C <sup>v</sup> VJ | C <sup>v</sup> VT | C <sup>v</sup> VM | C <sup>v</sup> VN | C <sup>v</sup> V <sup>n</sup> G | 計         |
|       | a        | 79(42%)          | 0                 | 0                 | 0                 | 0                 | 0                 | 107(58%)                        | 186(100%) |
| i     | 246(51%) | 80(16%)          | 8(2%)             | 33(7%)            | 38(8%)            | 63(13%)           | 19(4%)            | 487(100%)                       |           |
| u     | 23(52%)  | 2(5%)            | 1(2%)             | 2(5%)             | 0                 | 8(18%)            | 8(18%)            | 44(100%)                        |           |
| e     | 6(11%)   | 11(20%)          | 12(22%)           | 1(2%)             | 7(13%)            | 17(31%)           | 1(2%)             | 55(100%)                        |           |
| o     | 86(69%)  | 1(1%)            | 0                 | 0                 | 0                 | 0                 | 37(30%)           | 124(100%)                       |           |
| 合拗音系列 |          | C <sup>w</sup> V | C <sup>w</sup> VW | C <sup>w</sup> VJ | C <sup>w</sup> VT | C <sup>w</sup> VM | C <sup>w</sup> VN | C <sup>w</sup> V <sup>n</sup> G | 計         |
|       | a        | 34(37%)          | 0                 | 14(15%)           | 3(3%)             | 0                 | 28(30%)           | 14(14%)                         | 93(100%)  |
| i     | 27(77%)  | 0                | 0                 | 3(9%)             | 0                 | 4(11%)            | 1(3%)             | 35(100%)                        |           |
| u     |          |                  |                   |                   |                   |                   |                   |                                 |           |
| e     | 18(30%)  | 0                | 6(10%)            | 5(8%)             | 1(2%)             | 30(50%)           | 0                 | 60(100%)                        |           |
| o     | 1(10%)   | 0                | 0                 | 1(10%)            | 0                 | 7(70%)            | 1(10%)            | 10(100%)                        |           |

全体として、直音系列(CV\_)では、エ列には<sup>n</sup>G/が付きにくく、オ列には/J/が付きにくいという例外があるが、ほぼすきまなく埋まっているのが特徴である。対して開拗音系列(C<sup>v</sup>V\_)では、ア列、オ列開拗音は<sup>n</sup>G/以外の重音節を許容せず、ウ列開拗音は/N, <sup>n</sup>G/以外の重音節を許容せず、エ列開拗音(/je\_)はエツ、エウが少ないという特徴を有している。さらに大まかな見方が許されるならば、和語と重ならない新設部分であるア列、ウ列、オ列開拗音では、重音節の韻尾はほぼ<sup>n</sup>G/に限られているということであり、借用語によって拡大された部分は、相当あきまの多い体系として成立したということが確認される。



### 3. 音素配列の変遷

#### 3.1 成員の変化

次に、院政期末から現代にかけて、音素配列上どのような変化が起こったのかを確認した上で、両者の違いについて考察する。まず、同じ位置に現れる成員がどのような変化を起こしたのかを、主に音素配列に関わる事象のみ挙げる。

##### ○頭子音成員の変化

- ・ 合拗音の消滅による/k<sup>w</sup>、ŋ<sup>w</sup>/の削除(k<sup>w</sup>a(華)とka(佳)の合流、ŋ<sup>w</sup>a(𠵼)とŋa(餓)の合流)
- ・ 四つ仮名の混同による/<sup>h</sup>d'/の削除

##### ○韻尾成員の変化

- ・ /M/と/N/の合流(甘一寒)
- ・ /T/の開音節化による消滅(末mat→matu~matsu)。促音のみ/Q/として残る。
- ・ /W/と/<sup>h</sup>G/が合流して/W/に。(秋シウ、衆シウレが合流して両者ともシウに)
- ・ /W/が前接母音と融合して長音音素/R/に変化し、特定の音価を持たない(前の母音によって音価が変化する)韻尾となる。(aW/→oR/, uW/→uR/, eW/→<sup>h</sup>oR/, oW/→oR/, <sup>h</sup>aW/→<sup>h</sup>oR/, <sup>h</sup>iW/→<sup>h</sup>uR/, <sup>h</sup>uW/→<sup>h</sup>uR/, <sup>h</sup>oW/→<sup>h</sup>oR/)
- ・ 長音の開音と合音の合流(aR/→oR/, <sup>h</sup>aR/→<sup>h</sup>oR/)

#### 3.2 軽音節と重音節の割合

次に、軽音節と重音節の割合について、院政期末と現代の漢字音ではどのように異なるのかを確認する。

〈表14〉院政末における軽音節と重音節の割合

| 音節の軽重<br>主母音 | 直音系列 |     | 開拗音系列 |     | 合拗音系列 |     |
|--------------|------|-----|-------|-----|-------|-----|
|              | 軽音節  | 重音節 | 軽音節   | 重音節 | 軽音節   | 重音節 |
| a            | 24%  | 76% | 42%   | 58% | 37%   | 63% |
| i            |      |     | 51%   | 49% | 77%   | 23% |
| u            | 52%  | 48% | 52%   | 48% |       |     |
| e            | 12%  | 88% | 11%   | 89% | 30%   | 70% |
| o            | 44%  | 56% | 69%   | 31% | 10%   | 90% |

〈表15〉『かたりぐさ』軽音節と重音節の割合

| 音節の軽重<br>主母音 | 直音系列 |     | 拗音系列 |     |
|--------------|------|-----|------|-----|
|              | 軽音節  | 重音節 | 軽音節  | 重音節 |
| a            | 36%  | 64% | 97%  | 3%  |
| i            |      |     | 67%  | 34% |
| u            | 52%  | 48% | 27%  | 73% |
| e            | 19%  | 81% |      |     |
| o            | 31%  | 69% | 30%  | 70% |

院政期末と現代とを比べると、直音系列では大きな変化は起こっていない。一方拗音系列では、ア列の重音節、ウ列の重音節が減り、オ列の重音節が増加している。これは長音/R/の成立と、開合長音の合流が原因である(次項参照)。

### 3.3 連母音の長音化が音素の組み合わせ制限に及ぼす影響

漢語音節の音素の組み合わせ制限の変化として顕著なものとしてア行とワ行の合流(/wi/と/ji/、/we/と/je/、/wo/と/o/の合流によって/wi/、/we/、/o/があきまとなる)があるが、さらに大きな影響を与えたのは中世における連母音の長音化である。この変化は、音節レベルでは次の表16のように整理できる<sup>10)</sup>。

連母音の長音化は、音声レベル、音韻レベルでこれまで様々な研究が積み重ねられているが、音素配列の面から見れば、次のことが言える。

- ・長音音素の成立は、変化の途中には開長音([ɔ:]あるいは[ou])という過程も存在したが、最終的には/aW/を/oR/に、/eW/を/oR/に、/iW/を/iuR/に移動させた。
- ・ア段、エ段において、単に/W/が/R/に置き換わったのではなく前接の母音が交替したのは、従来さまざまな説明が試みられてきた<sup>11)</sup>が、音素配列の面からは、特に所属形態素が多いア段、エ段において、/J/と/W/の共存が避けられたと解釈できる。

〈表16〉 連母音の長音化による移動

| 院政期末            |     |     | 現代語             |     |
|-----------------|-----|-----|-----------------|-----|
| aJ              | 386 | 119 | aJ              | 119 |
| aW              |     | 159 |                 |     |
| <sup>j</sup> aJ |     | 0   |                 |     |
| <sup>j</sup> aW |     | 108 |                 |     |
| <sup>j</sup> iJ | 107 | 8   | iJ              | 8   |
| <sup>j</sup> iW |     | 99  |                 |     |
| uJ              | 71  | 27  | uJ              | 170 |
| uW              |     | 33  | uR              |     |
| <sup>j</sup> uJ |     | 1   | <sup>j</sup> uJ |     |
| <sup>j</sup> uW |     | 10  | <sup>j</sup> uR |     |
| eW              |     | 81  | eR              |     |
| eJ              | 214 | 109 |                 |     |
| <sup>j</sup> eW |     | 12  |                 |     |
| <sup>j</sup> eJ |     | 12  |                 |     |
| oW              | 153 | 115 | oR              | 513 |
| oJ              |     | 0   |                 |     |
| <sup>j</sup> oW |     | 38  | <sup>j</sup> oR |     |
| <sup>j</sup> oJ |     | 0   |                 |     |

### 3.4 音節数の変化—まとめにかえて

本稿では、中国語と日本語の中間的な様相を呈して定着した日本字音(小松1995)が、徐々に和化し、現在では体系を同じくするものとして一致に至る過程を、音節内の音素配列の面から大まかに見てきた。

『名義抄』『蒙求』において、論理的に結合可能な音節の種類は742、そのうち漢字音として実際に使用されている音節の種類は400である。使用率(結合可能な音節数に対する、実際に使用されている音節の割合)は54%であった。

『かたりぐさ』において、論理的に結合可能な音節の種類は474、そのうち漢字音として使用されている音節の種類は295である。使用率は62%であった。

10) 院政期末の数字は前節調査の所属字数。ただし/W/の欄には/W/と/nG/の合流を反映させ、両者を合算した数を記載してある。「現代語」の数字は「院政期末」の所属字がそのまま移動したことを想定したもの

11) ローレンス・ラング(1971)、高山(1992)など

したがって、音素成員の削減も含めた音素配列上の規則の変化によって、105音節が現代語までに区別されなくなったことになる。

外的要因によって成立した日本漢字音の音韻体系は、和語の音韻体系に比して、成員が多く、あきまの多い体系であった。現代語に変化していく過程で起こった成員の統合・削減は、結果としてそのあきまを埋める働きをしている。一方で、連母音の長音化によるオ段長音の増加は、例えば/eJ/や/aR/、/wi/などの新たなあきまを生み出したが、全体としては区別する音節数を縮小しながら、使用率を上げる方向で変遷してきたと捉えられる。なお、その変遷において大きな役割を果たしたと考えられる和語の影響が具体的にどのようなものだったのかが問題となるが、後考を俟ちたい。

### 追記

本稿は韓国日語教育学会第27回国際学術大会(2015年4月25日、東国大学校)において発表した原稿に修正を加えたものである。発表においては、李成根教授をはじめとして多くの方より貴重なご意見を頂戴した。記して謝意を表す。

### ◀参考文献▶

- 入江さやか(2012)「日本語の音素の分布・配列に関する歴史的研究」『同志社日本語研究』別刊1：pp.1-210
- 小林芳規(1971)「中世片仮名文の国語史的研究」『広島大学文学部紀要』特輯号30-3：pp.1-182
- 小松英雄(1995)「日本語音の諸体系—読誦音整備の目的を中心に—」築島裕編『日本漢字音史論輯』汲古書院：pp.13-37
- 小松英雄(2001)『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』笠間書院
- 城田俊(1993)『日本語の音』ひつじ書房：pp.1-260
- 高山知明(1992)「日本語における連接母音の長母音化」『言語研究』101：pp.14-34
- 高山倫明(2003)「日本語音韻史研究とその課題」『音声研究』7-1：pp.35-46
- 那須川訓也(2014)「音節」佐藤武義・前田富祺編『日本語大事典』朝倉書店：pp.285-286
- 沼本克明(1995)「観智院本類聚名義抄和音分韻表」築島裕編『日本漢字音史論輯』汲古書院：pp.125-186
- \_\_\_\_\_ (1997)『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院：pp.1-1245
- \_\_\_\_\_ (2014)『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず—一字音仮名遣い入門—』汲古書院：pp.1-312
- 肥爪周二(2005)「音韻史—拗音をめぐって」『国文学解釈と教材の研究』50-5：pp.52-57
- 福島直之(1986)「音配列論序論」『横浜国立大学人文紀要.第二類. 語学・文学』33：pp.41-52
- 松崎寛(1994)「和語・漢語・外来語の語形と特殊拍の音配列上の制約—『分類語彙表』3万1千語を対象として—」『東北大学文学部日本語学科論集』4：pp.75-86
- ローランド・ラング(1971)「文献資料に反映した中世日本語エ列音節の口蓋性」『国語学』85：pp.36-42

[Abstract]

### The Syllable Phonotactics that Construct Sino-Japanese Morphemes and Their Transformation

A high percentage of Japanese language words—particularly nouns—are Sino-Japanese. The simplicity of the phonotactics that construct Sino-Japanese morphemes has been pointed out by many scholars heretofore. This paper considers from a historical perspective the syllable phonotactics that construct Sino-Japanese morphemes.

In the mid-12th century, there were 742 theoretically combinable syllables, 400 of which were actually used as Sino-Japanese. The usage rate (the ratio of actually used syllables to the number of combinable ones) was 54%. In the contemporary Japanese language, there are 474 theoretically combinable syllables, 295 of which are used as Sino-Japanese. The usage rate is 62%. This means that 105 syllables have come to be no longer distinguished between due to phonotactic rule changes, including a reduction in the number of phoneme members.

The Sino-Japanese phonetic system, which came into existence based on external factors, has many members and distribution holes compared to the native Japanese one. The combining of and reduction in phoneme members that occurred in the process of the contemporary Japanese language emerging has functioned to fill these distribution holes. On the other hand, while the increase in the long "o" due to the lengthening of sequential vowels has given rise to, for example, new distribution holes such as /eJ/ and /aR/; overall it has reduced the number of them while lessening the number of syllables that are distinguished between. As that the "ability for culture education" was a requirement of a NT and was particularly important in TT.

Key words Sino-Japanese, syllable, phonotactics, syllabic structure, distribution holes

◆ 浅田健太郎 (Asada, Kentaro)

・ 全 名 : 島根大学法文学部言語文化学科、准教授

・ E-mail : kentasada@soc.shimane-u.ac.jp